シリーズ
「コロナ禍をふりかえる」

その1. 新型コロナのパンデミック
～初期のころの南部は…

今号から7回の予定で、「コロナ禍をふりかえる」を連載します。

新型コロナ感染症の世界的なパンデミックの中、私たちも毎日、どうしていいかわからないことが、つぎつぎにおこりました。

初期のころ、かおりハウス入居者の松島さんが熱を出され、浅香山病院の発熱外来を受診しました。テントの中で看護師さん（おそらく感染症対応の専門の方）が仁王立ちになって、他の医療スタッフにひとつひとつの動きや感染対策の指示をしておられるのを目の当たりにして、医療従事者でもこんなに大変なのに私たちはやっていけるのか、すごく不安になりました。でも、「あらゆる意味で感染症ではありません」とのドクターのやさしい笑顔には、勇気と覚悟をもらいました。

それからは情報をあつめて共有する。みんなでいろんな防護や感染対策を覚えたり、感染症への差別をうまないように学習しました。本当に必死の想いでした。それでも、大切な仲間がコロナで亡くなりました。ご家族が亡くなられたスタッフもいます。

5類になっても「コロナは終わっていない」と思う一方で、少しずつ記憶がうすれてはいないか。また新しいスタッフは、コロナ禍の支援状況を知らない人もいます。大変だったことや、みんなで苦労したことをムダにしないように、どうやったら教訓にし継承できるのかと考えて、昨年8月、コロナ禍をふりかえる座談会をしました。このシリーズでは、そこで出された声

や、新たに書いてもらった原稿などを掲載してゆきます。今回は、初期の最も混乱していたさ中の事例などを見てゆきます。

……

　クローバーでは、コロナ禍初期に入居者の大林さんが「濃厚接触者」と認定され、ホームとは別の建物（たいやきスクエア）で、14日間、スタッフつききりで隔離生活をしてもらいました。大林さんはマスクができないのですごく心配しましたが、ずっとお元気で、「おうち　かえりたい…」と、はかなげにつぶやかれたりしました。日がたつにつれて本当にこんなかわいそうなことをしないといけないのかと思ったり、でも決まりをやぶって何かあったらそれこそ大変と思ったりしました。慣れない防護衣で対応を続けながら、たいやきの中で「お散歩」やストレッチをしたり、ペットボトルで音のなるおもちゃを作ったりして、少しでも大林さんがストレス発散できるように取り組んでくれたスタッフには、今でも本当に感謝しています。

　一方で、時期は少しあとになりますが、在宅のご家庭の課題には、対応ができていませんでした。

……

大井　隆史さん（南部交流センター通所者

～当時は高齢のご両親と3人で生活しておられました）

　まずお父さんが発熱、自分もお母さんも熱が出てきました。訪問看護師さんから「コロナではないか？」と言われましたが、ＰＣＲ検査の予約がとれず、抗原検査のキットをもってきてくれて、母と自分の陽性がわかりました。父も翌日の通院で陽性がわかりましたが、自宅療養になりました。訪看さんが毎日来てくれましたが、２週間ヘルパーは入れず困りました。朝・晩役所からの電話もかかってきて、体温とＳＰＯ２を伝えますが、電話を取

れるのも自分だけだし、いつ電話がくるかわからなかったので、なかなか横にもなれず困りました。役所から食料と検査キットなどの「応援パック」も送ってくれましたが、玄関の外に置いてくれただけだったので、家に持って入るのもひと苦労でした。食料は、缶詰やレトルトがほとんどで、自分には開けにくいものや、調理が必要なもので、とてもストレスがたまりました。1日1食くらいしか食べられず、だんだん判断力も落ちていきました。

　1週間後、検査キットを使い検査するも陽性。結局、アマゾンでもうひとつ家族分の検査キットを買いました。役所は、電話をくれるだけで、こんなにしんどいのに病院にいれてくれたらいいのに、と思いました。家族が高齢なので、早く対応してほしかったなと思いました。

……

　医療もパンク、行政も混乱していたと思いますが、障害者と高齢者のご家族の率直な想いです。相談員さんや別居のご家族も対応して下さっていましたが、南部としても、せめて食べやすいものを差し入れするとか、もっと対応できなかったか、とても後悔しました。グループホーム以外の利用者さんの感染時について、情報共有や対応の課題を具体的に認識しました。

……

中村 桃子さん(元 南部交流センター職員)

　コロナの初めのころは、ただただ こわいだけでした。自分たちの仕事は変わらずでしたが、いきなり学校がお休みになったり、ふだんの通勤時間の電車に誰も乗っていなくて、とても異様な感じでした。家族から、「仕事行くの？」と言われたこともありました。「緊急事態宣言でも仕事があるのか」という純粋な疑問で、介護の仕事への偏見とかではないけれど、世の中、それだけ混乱していたと思います。

コロナの最初のころ、介護職の友人のお子さんが、学校で「コロナ」と言われた、と言っていました。きっと、テレビとかで高齢施設のクラスターのこととかが報道されていたりしたせいかな、と言っていました。お子さんは、それで学校に行けなくなったり、ということはなかったけれど、言った子も、大人の影響を受けてしまってたんじゃないかと思います。

私もコロナには2回かかりました。2回目はふつうのかぜみたいな感じで、ぜん息もでませんでしたが、1回目のときはゾコーバというお薬が処方されて5日間のみましたが、自分にはあまりきかなかったと思います。のどが痛くて、つばをのみ込むのもつらかったし、ゼリーもとびあがるくらい痛かったです。ポカリスエットもしみました。後遺症もすごくしんどくて、セキやぜん息が1ヶ月以上も続きました。亡くなる方も多かったし、治療法やお薬の研究をもっとすすめてほしいです。

交流センターは日々、どうしよう…、という感じでした。体調の悪い人の通所をどうするか、とくに交流センターに来られてから「熱がある」となった場合など、よく混乱しました。休んでもらわないといけないかどうかの判断は難しいし、心苦しい想いがありました。はっきり「こもり熱」とわかれば対応できるけど、なかなか判断がつかず、混乱続きでした。

グループホームや一人暮らしの障害者がコロナのときに、事業所さんによって、ヘルパーさんに来てもらえないのは、本当に大変だと思います。そして、会社の方針でも、ふだん通り介護に行ってあげられないのは、ひとりひとりのヘルパーさんも、とても心苦しい想いをされていたと思います。

……

次回は、障害者がコロナにかかったときの対応や入院についてです。